

ダグラス・コープランド文学における 環境表象の起源と発展

——エッセイ「黒いどろどろ」を中心に——

荒木陽子

はじめに

カナダのヴァンクーヴァーを拠点に活動する作家・芸術家、ダグラス・キャンベル・コープランド (Douglas Campbell Coupland, 1961-) は、冷戦の只中にカナダ空軍のパイロット兼軍医であった父の赴任先、旧西ドイツ、バーデン・ゾーリンゲンの NATO カナダ軍基地で生まれた。特に日本においては、コープランド文学の翻訳が、文学作品としてよりむしろポスト・ベビーブーマーをめぐる新世代論や、インターネット以後の新時代論として訳出された感のある初期の作品群——『ジェネレーション X ——加速された文化のための物語たち』 (*Generation X: Tales for an Accelerated Culture*, 1991)、『シャンプー・プラネット』 (*Shampoo Planet*, 1991)、『ライフ・アフター・ゴッド』 (*Life After God*, 1994)、『マイクロサーフス』 (*Microserfs*, 1995)、『神は日本を憎んでいる』 (*God Hates Japan*, 2001) ——に限られることもあり、わずかな例外を除き、ポピュラーカルチャーをめぐる限られた文脈で論じられてきたように思われる。

一方で、本国カナダでは蜂絶滅後の未来の地球を描いた 2009 年の小説『ジェネレーション A』 (2009) の出版に前後して、2000 年代 (以下、本稿ではゼロ年代と表記する) 末よりコープランドの環境意識に注目が高まっている。初期からの読者にとっては、コープランドが正面を切ってというわけではなかったが、デビューから一貫して環境、特に核汚染問題を意識してきたことは周知の事実であるから、カナダ社会および文学研究者からの彼の環境意識への注目は遅すぎる感もある。しかし、コープランドが『ジェネレーション A』に至るまで、第 1 小説以来一貫して描きながらも、正面から環境問題に関して発言してこなかったのはなぜかだろうか、という疑問は残る。また、蜂群崩壊後の世界を舞台にする『ジェネレーション A』とて、読み方によってはそのタイトルが示す通り、未だ環境を世代論のオブラートにくるんで語っているとも言える。筆者はその理由をコープランドの人間による環境破壊に対する強い恐怖に求めたい。

本稿の目的は、他稿で展開するコープランド小説中の核表象の検証準備として、彼の環境意識のコアにある恐怖の起源を求めることである。そのため、本稿はまず、ゼロ年代以降のコープランド評価の変化を概観した後、コープランドが、なぜデビューから 20 年以上も世代論の一部として核を論じながらも、比較的近年までその他の環境的テーマに正面

から向き合わなかったのかを、『ジェネレーション A』出版時のインタビューをもとに探る。そして、彼の環境意識の起源を明確に示した 2015 年のエッセイ「黒いどろどろ、環境、そして世界の終末」(“Black Goo, the Environment, and the End of This World”、以下他媒体に再掲載された記事も含めて、特筆すべき違いがない際は「黒いどろどろ」と省略)から、さらにそのもととなった『ライフ・アフター・ゴッド』所収の作品「間違った太陽」に遡って、コーブランドの環境意識の起源にある恐怖の在処を検証してゆきたい。

1. ゼロ年代後半以降のコーブランド文学の評価と環境

前述のとおり、日本における翻訳紹介が世紀転換期以降停滞している一方で、コンスタントに文学作品が出版されてきた英語圏において、コーブランドは着実にその文学世界を広げ、その評価を高めてきた。カナダ放送協会ラジオ局 (CBC ラジオ)、ハウス・オブ・アナンシー出版、そしてトロント大学マッシー・カレッジの共催で、毎年著名な文化人や学者が行うマッシー・レクチャーの演者としての抜擢 (2010) や、同年授与された名門ブリティッシュ・コロンビア大学の名誉博士号は、カナダ国内での評価の高まりの表出の代表であろう。

作風の変化に目を向けると、ゼロ年代以降の作品群は、依然比較的若年の登場人物の登用、ポピュラーカルチャーへの言及、サイエンス・フィクション的手法や、時にポストモダンのミクスト・メディアの手法を用いながらも、初期の奇抜さからは若干の距離を置き、孤独や心身の障害、そして環境などの社会的に関心の高い問題をテーマの中心に据える、「より伝統的な文学」に歩み寄っている。このことも、彼の評価の高まりと関連しているであろう。そろってゼロ年代の後半に出版された、アンドリュー・テイト (Andrew Tate) やテリ・スーザン・ザーブリグ (Terri Susan Zurbrigg) によるコーブランド作品の研究書も、高まりつつあった彼の文学者としての評価の表れといえよう。しかしながら、彼らの研究もゼロ年代前半までの初期作品に関するものに限られていることには、ここに言及しておきたい。

コーブランドの作品およびその研究の潮流に大きな変化が現れるようになるのは、これらの研究書の出版後であるから、これらの研究書のみ依存する者はその変化を見落とすことになる。筆者は 2009 年の小説『ジェネレーション A』の出版を潮流変化のきっかけのひとつとして指摘したい。蜂が絶滅したはずの未来の地球で蜂に刺された 5 人の語り手により展開されるこの作品の出版後、コーブランドはそれまで語ることを避けてきた、環境問題についてインタビューやエッセイ等で全面的に語り始める。前述のマッシー・レクチャーへの抜擢や、彼にとって初めてのプレナ・クラーク・グレイ (Brenna Clarke Gray) による文学系学術雑誌上インタビュー (2010)、環境批評家のジェニー・カーバー

(Jenny Kerber) の手になる学術論文 (2014) の発表は、コーブランドの環境意識が昨今のカナダ社会の関心、そしてゼロ年代半ばのアメリカ合衆国を拠点とする文学環境学会 (ASLE-US) 本体からのカナダ支部 (ALECC) 独立にはじまるカナダ文学研究分野におけるエコクリティシズムの興隆とうまくリンクした結果であろう (Szabo-Jones 544)。

ただし、筆者はコーブランドの環境意識は実のところ、それまでに文学研究者が注目しなかったものの、『ジェネレーション A』に至り急に発生したものではないことをここにもう一度確認したい。特に放射性物質、そして核が引き起こす環境破壊と爆発による世界の崩壊というアポカリプティックなイメージは、『ジェネレーション X』から近年の作品に至るまでの作品群を時に目立たない形でも貫いている。しかしながら、それはこれまでは環境の観点からではなく、冷戦期に育った X 世代を特徴づける要素として描かれ、また注目されてきた感がある。ただ、読み手側の関心の偏りだけが、コーブランドの環境意識の表出を拒んでいたというわけではない。そもそもコーブランドが『ジェネレーション A』に至るまで、作品の端々でずっと描き続けながらも、自然環境が破壊された地球を設定とする小説を描かなかったのはなぜだろうか。次章ではこの問題に取り組みたい。

2. 環境を書くことへの躊躇:インタビュー「黒いどろどろ」と『ジェネレーション A』の間に

2009 年の『ジェネレーション A』出版後、2010 年 8 月にダグラス・コーブランドは初めて文学系学術誌のインタビューに応じる (Gray 256)。1990 年代初頭にはじまる彼の作家としての活動を考えるとかなり遅い。このグレイによる学術インタビューに先駆けて、同年 3 月、コーブランドはカナダの著名インタビュアー、アラン・グレッグ (Allan Gregg) によるテレビ・インタビューも受けている。カナダ最大の人口を誇るオンタリオ州の公共放送局 TV オンタリオ (TVOntario、しばしば TVO) で放映された同インタビュー中、グレッグの『ジェネレーション A』において「環境的なメッセージを探求しているのか」との問いに対して、コーブランドは 1973 年にヴァンクーヴァーで起こったバンカー油流出事故の片づけを手伝ったことを話した後、「未だに話すのがつらい」と語った後、5 秒以上絶句してしまう (13:40-14:01)。

この驚くほど正直な告白と長い沈黙は、コーブランドが第 1 小説以来、作品の端々で環境問題、特に核汚染による世界の終末を描き続けたのにもかかわらず、『ジェネレーション A』出版に至るまで長編小説の設定という明確な形で環境問題を取り上げなかったという事実の背景を、少なくとも部分的には説明するであろう。グレッグとのインタビューで、コーブランド自身が「残りの人生を変えた」と語るこの少年時代の経験を、その後さらに数年を経てより詳細かつクリエイティブなノンフィクション・エッセイとして雑誌『ヴァイス』(Vice、2015 年 10 月 5 日付) オンライン版に発表したのが、「黒いどろどろ、

環境、そして世界の終末」である。このインタビューはその後、2016年に「黒いどろどろ」として、作品集『ビット・ロット』(Bit Rot)、および「黒いどろどろ、1973」(“Black Goo, 1973”)として、隣接するアメリカ合衆国ワシントン州側で事故を報じる翌日の新聞記事を含む4枚の写真を加えた形で『みんなあんまりにも急だ：現代カナダ環境のカウンター・ヒストリー』(It's All Happening So Fast: A Counter-History of the Modern Canadian Environment、同名のカナダ建築センター主催の共同展覧会のカタログ)上にも再掲載されている。本エッセイの複数の媒体への再掲載は、そのエッセイの持つインパクトを示唆する。¹⁾

コーブランドの様々な回想の断片の集合体である同エッセイの核をなす「黒いどろどろ」とは、1973年の秋、当時11歳だったコーブランドの住んでいたヴァンクーヴァーのバラード湾とイングリッシュ・ベイにおいて発生した2度の海洋事故によって流出したバンカー油である。エッセイは同地域で繰り返されることになる海洋燃料油流出事故に起因する、この黒いどろどろが引き起こす海洋汚染とその除染作業を中心に展開する。1973年9月25日付地元紙『ヴァンクーヴァー・サン』(Vancouver Sun)の第1面は、同日午前3時19分、日本船籍の貨物船サン・ダイヤモンドとイギリス船籍の貨物船エラワンが衝突し、エラワンから9千トンの燃料が流出したことを報じる。²⁾コーブランドは、この一度目の事故から半日が経過した同日午後、学校活動の一環として自らを含む地元の子どもたちや有志による熊手をつかった除染作業の様子を「箸で一輪車サイズのジェロー(ゼリーの商標名、筆者注)を捕まえようと格闘する」と、彼らしく大衆の商品名に言及しつつ、コミカルかつ滑稽に表現する(197)。

しかし、先に見た滑稽な除染作業表象とは相反して、その作業を「陰鬱な」(“dismal”)という言葉を使って表す様子や(197)、黒いどろどろの物質的正体であるバンカー油を「この世で一番汚くて、しつこくて、気味の悪い油」(“the nastiest, stickiest, creepiest oil there is”)であるとか、「ずるずるの磁気を帯びた黒い下痢」(“runny magnetic black diarrhea”)とする表現は(196)、コーブランドの長い沈黙につながる強い嫌悪や恐怖を表すと言えよう。さらに彼が環境汚染の元凶である郊外在住の中産階級の一員として、作業中に油にさらされた瀕死の鵜を連れたヒッピーから受けた批判は、コーブランドのトラウマを決定づけていると思われる。この経験は、彼の作品中にしばしばみられる先行世代のヒッピーに対する不満や不信感につながっていると考えてよかろう。ただ、ヒッピーにマイナスの感情を持つ一方で、コーブランドは「その夜は眠れなかった、1か月ぐらいはよく眠れなかったし、あの鵜のことを考えると未だに眠れなくなる」と語ることから、この鵜を連れたヒッピーとの交流がその後の彼に決定的な影響を与えたこともわかる(198)。このように、エッセイ「黒いどろどろ」においては、先のインタビューでコーブ

ランドが沈黙という形で示した環境を語ることについての困難さが、明確に文字化されている。

さらに、筆者がこの記事に注目するのはコーブランドがこのエッセイにおいて、1973年にヴァンクーヴァーの海岸で対峙した黒いどろどろと核、そして映画『蠅の王』(*Lord of the Flies*, 1963)を「恐怖」(“fear”)というキーワードでつないで見せるからである。この3つの点と恐怖のつながり説明するために、次章ではエッセイ「黒いどろどろ」をその構造に注目しながら精読したい。それは結果的に、コーブランド作品中に繰り返し登場する核とコーブランドの関係を理解することにもつながるであろう。

3. 黒いどろどろと核をつなぐ恐怖：エッセイ「黒いどろどろ」を考える

ここでエッセイ「黒いどろどろ」の構造に目を向けてみたい。実はこのエッセイの書き出しの параグラフは、その内容の大半をしめるヴァンクーヴァー沖で繰り返される原油流出事故にまつわるものではない。このエッセイは、アメリカ合衆国アラスカ州——というより日本の読者には距離的に近いアリューシャン列島の、と説明した方が、共感を得やすいかもしれない——アムチトカ島カニキンで合衆国最大級の地下核実験が行われた1971年11月6日午後の記憶の回想から始まるのだ。コーブランドは、核実験の爆発による振動が、アラスカからヴァンクーヴァーに続く地震断層を刺激し、故郷に大地震を誘引し、その結果巨大津波が発生する可能性におびえていた。そして以下のように20年以上を経て、実験の結果として当時想像していたであろう、見慣れた街が破壊される恐怖のイメージを、細部を徹底的に書き込みながら、次の通り文字化する。

真っ二つに引き裂かれたパーク・ロイヤル・ショッピング・センターは火を噴きあげ、カピラノ河上流のクリーヴランド・ダムも木^こ端^{はみじん}微塵に砕け散って、その下流に眠るショッピング・モールで運よく生き残れた人々さえも、丸のみにしてしまうだろう。埃^{ほこり}のようにちらつく街の明かりを見渡すことのできる斜面に横たわりながら、〈未来のキッチン〉を誇り、片持ち梁^{ばり}を特徴としたL字形のモダン家屋^{ハウス}なんかは、6時間後に訪れるであろう大津波によって一つ残らず押し流される運命にあった。(『ライフ』、78-79)

実験日の詳細かつ明確な記憶がある理由として、この日コーブランドは、友人の誕生日を祝うために、生まれて初めてノース・ヴァンクーヴァーのマクドナルドに行ったことを挙げています。このように日常の消費活動の中に、それとは一見不釣り合いな核の恐怖を位置づけるのは、後期資本主義社会の北米の消費活動の本質にせまるコーブランド独特の手法だ。

チェーン展開やマーケティング戦略により弱者を駆逐し拡大したマクドナルドの北米消費文化におけるシンボリックな位置づけを考えれば、消費主義文化を不可避と考えながらもそれに対する批判的な視点を失わないコーブランドが、初めてのマクドナルド体験と核実験によるハルマゲドンという2つの脅威のイメージを重ねて描く行為は、双方の暴力性を相乗的に暴露するうえで、効果的な表現方法であるといえよう。

さらに、ここで筆者が目にするのは、先に引用した「黒いどろどろ」の書き出しとしてリサイクルしたこのカニキン核実験の記憶が、コーブランド自身が述べる通り（195）、元とは言えば1992年に書かれた文章である点だ。初期からのコーブランド読者には一目瞭然であるが、それは1994年に出版された『ライフ・アフター・ゴッド』に所収された作品「間違った太陽」（“The Wrong Sun”）のうち、その冒頭に位置づけられた、核に関する個人的体験をまとめた第1部「太陽を思って（“Thinking about the Sun”）の書き出しでもあるのだ。「太陽」とは無論「核」のメタファーであろう。

コーブランドがこの「太陽を思って」において、前述のカニキン核実験のエピソードに続けて、彼が後に繰り返し描くことになる、核の原体験に触れている事実は注目に値する。それはドイツの基地に駐屯中の彼と彼の家族に降りかかったキューバ危機（1962）の創造的再構築である。3日間の厳戒態勢中、パイロットがいなくなった基地に残された主に女性と子どもたちを中心とする帯同者は、普段は倉庫として使われていた既婚者用宿舎の1階のシェルターに避難させられる。しかし、そこには食料も粉ミルクもなく、なぜかキャビアの缶詰が6缶だけ置かれていた。そしてそのことについて問われた上級軍人は、彼らには「それだけの価値しかないから」（82）と言い放ったという。この危機迫るシェルター体験は、第2部に位置づけられた、核による終末を複数の死者の視点から回想するフィクション「死人に口アリ」（“The Dead Speak”）の導入として有効に機能している。ただ、コーブランド自身は当時1歳に満たない乳児であったことを考えると、このエピソードは、彼自身の記憶でもなければ現実化することもなかった。

さて、ここでもう一度エッセイ「黒いどろどろ」に話を戻したい。表題にもなっている黒いどろどろ、つまり流失したバンカー油の話は、この「太陽を思って」からの引用に直接続いているわけではない。核実験とバンカー油流出、この2つのエピソードの間には「恐怖」にまつわるコーブランドの次のような見解が挿入されている。

そうだな、10～14歳あたりで覚えた恐怖感っていうのに匹敵するものはない。この類の恐怖は心の奥底に届いて、その後の世界観を最も強く色づけることになるみたいだ。映画の話になると、「11とか12歳ぐらいの時、ちょっと大人すぎるかもっていう映画を見ちゃって、その後の人生ずっとビビり続けてる映画って何？」って、質問

をするんだ。みんなそういう映画がある。僕の場合『蠅の王』がそれなんだけど、よくある答えは『エクソシスト』とか『イベント・ホライズン』とか。つまり、僕が言いたいのは、僕たちには恐怖に最も敏感な時期がある、ということなんだ。(196)

コーブランドの見た映画『蠅の王』はコーブランドの年齢を考えると1990年の作品ではなく、1963年のピーター・ブルック (Peter Brook) 監督作品であろう。英国の作家ウィリアム・ゴールドディング (William Golding, 1911-93) の手になる1954年出版の小説を原作とするこの映画では、未来の核戦争の最中にあるイギリスから疎開する学童を乗せた飛行機が、南太平洋にあると思しき無人島に墜落する。初めて核兵器が使用された第二次世界大戦への反応として書かれ、キューバ危機により核戦争が現実として感じられるようになった1960年代前半に映画化されたこの作品を、11歳で自らの住む街が核実験で崩壊する可能性を報じられた少年コーブランドが見た際に感じた恐怖は想像に難くない。

そして、ローティーン時代に経験した恐怖がその後の人生全体に及ぼす影響力を述べる先の引用に続く段落が、1973年コーブランドがその多感な時期の只中である13歳の時に経験した恐怖、つまりふたつの燃料油流出事故となる。エッセイ後半に描かれる通り、コーブランドが「時間の無駄だった」と考える除染作業に参加してから(198)ひと月もたたない10月24日早朝に、ドイツ船籍の貨物船ウエストフェリア号が流出させたバンカー油は、同日昼にはコーブランドが「ヴァンクーヴァーの戴冠用宝玉」(198)と讃える豊かな自然を誇るスタンレー公園に打ち寄せた。そして、この事故の際流出したバンカー油の跡は、40年以上たっても海岸付近の石や岩にこびりついているという。

しかも、ヴァンクーヴァー周辺では、このウエストフェリア号の一件が最後の流出事故とはならなかった。2015年10月にコーブランドが、このエッセイに「黒いどろどろ」というタイトルを冠して、環境に関するメッセージを『ジェネレーションA』以上に率直に書く直接のきっかけとなったのは、イングリッシュ・ベイにおいて2015年4月8日に再度発生した、キプロス船籍の穀物船マラザッサ号からのバンカー油流出事故であり、前回の事故から40年以上を経てもまったく改良されていないお粗末な除染作業の状況だ。更に執筆当時、コーブランドの少年期に持った恐怖を現実化し得る状況も存在した。彼がこのエッセイの最後に触れているように、キンダー・モーガン・カナダ社 (現トランス・マウンテン社) によるトランス・マウンテン・パイプラインやタンカーによる原油輸送量増量計画、そして地場産業であった鉱業 (銅) と製材業衰退後——コーブランドはそれを環境にも景観にもプラスであると考えているが——地域に雇用を再創出するため企画された、ブリティッシュ・コロンビア州政府とマレーシア国営の燃料大手ペトロナスによる液化天然ガスの生産・太平洋横断輸送計画が、ヴァンクーヴァー、スクォミッシュ、ウィ

スラーへと続く「カナダで最も美しく愛される景色の良い観光道路」(199)を台無しにする可能性があった。また2013年にはケベック州で原油輸送中の列車が脱線、爆発、炎上し、多数の死者を出した事故は、核爆発後のごとく壊滅した街の映像とともに盛んに報道されていたが、それも記憶に新しかったであろう。

このような状況をもとに、コーブランドはそれまで語ることを避けてきた経験や特にエネルギーにまつわる環境的メッセージを、それを思い出すことによる恐怖にも関わらず、沈黙するのも、『ジェネレーション A』のように世代論のオブラートに包むのではなく、正面から文字で語り、警鐘を鳴らさざるを得なくなったのであろう。コーブランドは率直なメッセージをエッセイ「黒いどろどろ」の最後に次のように表明している。

森林にまつわるすごくいい表現を今思い出した——「植林の最善のタイミングは20年前。でも今が2番目にいいタイミング」っていうやつだ。同じことが安全なエネルギー計画にも言える。信じてよ、20年なんてあっという間だよ。だから今始めよう。(199)

むすびにかえて

本稿はコーブランドが1991年の第1小説出版以来長きにわたり、世代論の一部として核問題にしばしば言及しながらも、その他の環境的テーマについてなぜ積極的な発言を行ってこなかったのかという問題を考察した。前半にコーブランドが核以外の環境問題について書くことの困難さの表出として、アラン・グレッグとのインタビュー(2009)におけるコーブランドの沈黙に注目した後、彼の沈黙の理由をエッセイ「黒いどろどろ、環境、そして世界の終末」(2015)に現れる少年時代に経験した恐怖に求めた。

最後に、コーブランドがどちらに対しても少年時代に強い恐怖を感じていたにも関わらず、核については比較的早くから語る事ができた一方で、この燃料流出についてはずっと後になるまでそうできなかったのか、という問題に立ち戻って、本稿を終えたい。筆者は2つの恐怖の最大の相違点を、前者が故郷崩壊のイメージを喚起しながらも、前章でも言及したとおり、未だ現実化していない点に見出す。本稿が明らかにした通り、後者は「黒いどろどろ」に描かれる瀕死の鳥のイメージや、現在も残る海岸の石や岩にこびりついた黒い油の跡に代表されるように(197)、繰り返し実際に故郷の環境を破壊した、現実化した悪夢である。そして、この我々にとっても身近な化石燃料は、2015年時点で彼が恐れ続けてきた核爆発同様に、街をなぎ倒し得る。コーブランドがエッセイで、誰にでも容易に恐怖を喚起する核と同列、ないしはそれ以上の脅威として、我々があまり意識せずに日常的に使用する燃料を位置づけ、エッセイ初出時のサブタイトルを「世界の終末」と結んでいることは、彼が非常に強い危機感を以て、燃料問題を世に問うていることの表

れでもあろう。

2015年にエッセイという形で環境を正面から語り始めたコーブランドは、この先フィクションで何を語るのか。本稿を書き終えた今振り返れば、『ジェネレーション A』の翌年、2010年に上梓された『プレイヤー・ワン』(Player One、マッシー・レクチャーの原稿となった小説)には、燃料価格の急騰と、アポカリプティックな燃料爆発のイメージが登場していた。視覚芸術家としてのコーブランドが、前掲の『みんなあんまりにも急だ』の他にも、2018年から翌年にかけて『ヴォルテックス』(Vortex)と題された海洋汚染に関する展示をヴァンクーヴァー水族館で開催し発信する一方で、フィクション・ライターとしてのコーブランドは、その後『史上最悪の人物』(2013)という前2小説とは比較できないほど「軽い」小説を上梓して以来、沈黙したままである。

本稿の一部(特に環境批評関連事項)は、平成28～30年度科学研究費助成事業(若手研究B課題番号16K16788)により執筆可能となった。関係各所に感謝を申し上げたい。

註

- 1) 本稿では各種の「黒いどろどろ」のうち、ページ数表記が必要な場合は、『ヴァイス』誌初掲時とは異なる写真であるものの、文字だけの*Bit Rot*版とは異なり、写真を伴う「黒いどろどろ、1973」のページ数を記載する。また後述する通り「黒いどろどろ」は、『ライフ・アフター・ゴッド』からの再録部分を含むが、それに関しては読みやすさを優先するために、江口研一による既存の邦語訳『ライフ・アフター・ゴッド』(角川書店、1996)を引用する。その他の訳者の記載のない日本語訳は拙訳である。
- 2) 歴史家の仕事と人々を結ぶことを目標とするウェブサイト ActiveHistory.ca に掲載されたショーン・ケラジ(Sean Kheraj)による2015年4月16日の記事「バラード湾、海岸、そして重油流出：歴史的展望」(“Burrard Inlet, Beaches, and Oil Spills: A Historical Perspective”)は、同地域で繰り返される重油流出事故の情報とその現在に続く影響を、コーブランドもエッセイに掲載している、ブリティッシュ・コロンビア州在住の写真家ジョン・デニストン(John Denniston)の当時の写真を用いながら、纏めており、この1973年の事故について知るための重要な資料である。

引用文献

- Bratishenko, Lev, and Mirko Zardini, eds. *It's Happening So Fast: A Counter History of Canadian Environment*. Canadian Centre for Architecture. 2016.
- Brook, Peter, director. *Lord of the Flies*. British Lion. 1963.
- Coupland, Douglas. *Bit Rot*. Penguin Canada, 2016.
- . "Black Goo, the Environment, and the End of the World." *Vice*, 5 Oct. 2015, https://www.vice.com/en_us/article/8gkbz3/douglas-coupland-black-goo-the-environment-and-the-end-of-the-world. Accessed 30 Dec. 2018.
- . "VORTEX." *Douglas Coupland*. 2019, <https://www.coupland.com/events/vortex>. Accessed 29 Jan 2019.
- . *Generation A*. Random House Canada, 2009.
- . *Generation X*. St. Martin's Press, 1991.
- . Interview by Allan Gregg. *Allan Gregg in Conversation*. TVO, 16 Mar.2010, http://podcasts.tvo.org/allangregg/audio/004757_48k.mp3. Accessed 12 Nov. 2018.
- . *Player One*. Toronto: House of Anansi, 2010.
- . *The Worst Person Ever*. Random House Canada, 2013.
- . "The Wrong Sun." *Life After God*. Pocket Books, 1994, pp.91-128.
- "Freighters Collide Off Point Grey." *Vancouver Sun*, 25 September 1973, p.1.
- Gray, Brenna Clarke. "A Conversation with Douglas Coupland: The Hideous, and the Cynical, and the Beautiful." *Studies in Canadian Literature*, vol.36, no.2, 2011, pp.255-78.
- Kerber, Jenny. "'Are You Turning into a Hive Mind': Storytelling, Ecological Thought, and the Problem of Form in *Generation A*." *Studies in Canadian Literature*, vol.39, no.1, 2014, pp.317-38.
- Kheraj, Sean. "Burrard Inlet, Beaches, and Oil Spills: A Historical Perspective," *ActiveHistory.ca*, 16 April 2015, <http://activehistory.ca/2015/04/burrard-inlet-beaches-and-oil-spills-a-historical-perspective/>. Accessed 15 Jan 2015.
- Szabo-Jones, Lisa. "Appendix: Taking Flight: Little Grey Birds to *The Goose*," *Greening the Maple: Canadian Ecocriticism in Context*, edited by Ella Soper and Nicholas Bradley, U of Calgary P, 2013, pp.531-46.
- Tate, Andrew. *Douglas Coupland*. Manchester UP, 2007.
- Zurbrigg, Terri Susan. *X=What?: Douglas Coupland, Generation X, and the Politics of Postmodern Irony*. VDM Verlag Dr. Muller, 2008.